令和６年度第１回
松戸市総合教育会議会議録

令和６年１０月９日

松戸市総合政策部政策推進課

令和６年度第１回松戸市総合教育会議
次第

日時：令和６年１０月９日（水）
午後１時００分から
場所：教育委員会５階会議室

１開会

２議事
議題１　教育施策の現状と課題について

３その他

４閉会

◎開会

〇渡邉政策推進課長

令和6年度第1回、松戸市総合教育会議にご参集いただきましてありがとうございます。
本日司会をさせていただきます、総合政策部政策推進課の渡邉でございます。よろしくお願いいたします。
それではまず、お手元の資料の確認をさせていただきたいと存じます。
左上ホチキスで留めてございますが、頭から次第、出席者一覧、それから席次、以下資料となりますが、資料1、教育施策の現状と課題について、Ａ3のものでございます。
続いてその他と右上に書いてございます、多世代まるごとの居場所づくり「まつどDEつながるステーション」。これはＡ4で4枚。4言語で4枚の資料になります。
それから、それとは別にリーフレットでございますけれども、ippo（イッポ）というリーフレット。
　2種類ですね。
これが2冊でございます。
過不足等ございますでしょうか。よろしいでしょうか。
それでは、これより、本郷谷市長に議事の進行をお願いいたします。
市長よろしくお願いいたします。

〇本郷谷市長

ではまず傍聴人につきましてご報告をさせていただきます。
本日の会議では3名の方から傍聴したい旨の申し出があります。
本会議につきましては、本日非公開にすべき事項がないことが見込まれるため、松戸市総合教育会議規程第7条に基づき、公開とし、松戸市総合教育会議傍聴要領に基づき傍聴人の受入れについて許可いたします。
また、会議開会以降、傍聴希望者があれば随時入室を許可いたします。
では、傍聴人を入場させてください。
次に、本会議では議事録を公開したいと考えております。
また正確を期するため録音につきましてもご了承をお願いいたします。
今回の会議の議事録署名人につきましては、和座委員、伊藤委員の2名にお願いしたいと思います。
それではこれより、令和6年度第1回松戸市総合教育会議を開会いたします。
それではお手元にお配りしております次第に従って議事を進めます。
本日の議題は、「教育施策の現状と課題について」です。
進め方といたしましては、資料について担当部署から説明した後に意見交換を行いたいと思います。
それでは事務局の方、説明お願いいたします。

◎教育施策の現状と課題について

〇渡邉政策推進課長

それでは生涯学習部教育政策研究課秋田課長、説明をよろしくお願いいたします。

〇秋田教育政策研究課長

教育政策研究課の秋田でございます。よろしくお願いいたします。
資料に沿って、教育施策の現状と課題について説明いたします。

まず左上の緑のところでございますが、教育施策につきましてはご存じの通り、このような国と県の計画を受けて、松戸市においては教育大綱、それから松戸市総合計画の中に、学びの松戸モデルの推進を位置付け、施策を推進しているところでございます。
左下の方に参りまして、具体的には、教育委員会は年度ごとに主要施策を策定し、これを実施し、次年度評価するというサイクルで施策を展開しております。
右上の方に参りまして、紺色のところでございますけれども、令和5年度に国は第四期の教育振興基本計画を定めました。
こちらは2つのコンセプトと、5つの基本的な方針に、16の目標と具体的な施策を体系的に示し、教育施策を推進するものでございます。
今年度当初に新教育長のもとで、新たなこの国の計画と学びの松戸モデル、また今年度の主要な施策との対応について検証をさせていただきました。
その結果、対応できてない施策、さらに高度な内容を求められる施策、加速する必要がある施策など、数個そういうものがあることがわかりました。
それらが含まれているのが、その真ん中あたりにございます4つの目標でございます。
教育委員会としては、施策を推進するにあたり、これを3つに構成し直しました。
それが右下の赤枠の中に囲まれているところでございますが、学びの松戸モデルの推進や、今年度の主要な施策に、これらをプラスして、プラスワンのイメージで取り組んでおります。
3つについて説明させていただきますと、1つ目の豊かな心の育成でございますけれども、いじめの防止や人権教育を引き続き主要施策として取り組むことはもとより、市民全体のWell-beingの向上として認識を高めていく必要がある。
2つ目の教育ＤＸの推進につきましては、明治維新以来150年ぶりの大規模な教育改革という方がいるほど、2020年から始まりました新学習指導要領による、令和の日本型学校教育とあわせて、こちらにございます個別最適な学びと協働的学びの一体的充実、主体的対話的で深い学び、探究学習、といった学びの構造転換を推進し、Ｓｏｃｉｅｔｙ5.0の社会を生き抜く子供たちの資質、能力を身につけるということ。
また特別支援が必要な児童生徒や不登校の児童生徒、また外国人の児童生徒の増加など、多様で複雑なニーズに対応した、学びの保障を図るための施策の具体的な検討、実践が必要であること。
また教員の働き方改革としましては、教員が楽になるということではなく、本来求められている教育に関する研究探求が十分に行えるようにすることが必要と考えております。
これらを解決するためには、これまでの事務や業務を単にＩＣＴ化するだけではなく、デジタル技術を用いて、根本から見直していく必要がある、つまり教育ＤＸにしっかりと取り組んでいく必要があると考えております。
3つ目といたしましては、新しい学校施設づくりでございますけれども、コンセプトとしまして、学びの構造転換を実現する空間活用を実現すること、地域コミュニティの拠点となるように、どのように、これらを実現するのかを検討する必要があること、また環境への配慮や、地域防災の視点も入れて取り組むことを基本として認識しつつ、下にございます、小金北小における長寿命化や、松戸駅周辺の文化拠点整備に合わせた、新たな学校施設づくりを検討してまいるということでございます。
今後も、波田教育長を中心に議論を深め、しっかりと松戸市らしさを打ち出して、施策を展開してまいりたいと考えております。

〇渡邉政策推進課長
ありがとうございました。
ここからの質疑応答意見交換に先立ちまして事務局からお願いが2点ほどございます。
1点目は、議事録作成の関係から、ご発言の際には、お名前をおっしゃってから発言いただければと存じます。
2点目は、ご発言の際はできるだけマイクに近づいてご発言くださいますよう、ご協力をよろしくお願いいたします。
それでは市長、お願いいたします。

〇本郷谷市長
まず今日の進め方ですが、まず資料、今の内容について、もっと具体的に聞きたい内容や質問等がございましたらまず、聞かせていただきたいと思います。
2つ目は今日の内容は特に何かを決めるとかそういうことでありませんので、ざっくばらんにそれぞれの方、皆さん方が持っておられる問題意識だとか、課題について言っていただいて、特に何かに集約するということは考えておりませんので、自由に議論したいなと思います。
予定としては1時間ぐらいの予定でおりますけれども。それでは簡単な説明ですが、今の教育委員会の説明の中でいろいろ質問があれば、質問していただければと思いますけど、そういう進め方でよろしいでしょうか。
それではまず今説明していただいた内容につきまして、内容理解のために、質問ある方は挙手して、質問していただければと思います。

（山形委員）
山形です。ありがとうございます。
今のご説明の中での、1つ気になったところ、何か松戸市らしさという言葉があって、そのらしさというのは、何かなというところを、私は松戸に住んで、24年になりますが、そこの部分について、どんなところを考えてらっしゃるかというか、そういうところを補足というか、聞きたいなと思います。

〇本郷谷市長
よろしいですか、事務局。らしさ、素晴らしさって難しいですけど、何かあれば説明お願いします。

〇中坂学校教育部長
学校教育部長でございます。
一言で、松戸市らしさということで、本当に多岐にわたっているかなというふうに思います。
やはり1つは、児童生徒数で3万4000名ほどのですね、児童生徒を抱えている。
また学校数が、小中高合わせて66校あるというところ。
それぞれの独立した学校経営っていうところが1つ難しさなのかなと。その中で、やはり主として、柱をしっかりお示しすることで、それぞれの学校が特色を持った教育実践をしていけるというところに繋がってくるというところで、こちらの豊かな心の育成、ＤＸ、学校づくりというところが、現在は、課題となっているというようなところではないかなと。
あとはやはり、人口が50万人というところと、東京から近いというようなところ。

またそれと同時にですね、もともと田園地域であった部分もございますので、そういった意味で、表現があれですけど、地元のあり方と、新住民の方とが融合していくような都市型のですね、教育が進められていくというところが、松戸らしさかなと思います。

（山形委員）
もう1点はここの場所でいうWell-beingという言葉が、今、とても業界では流れてきていて、私もそのWell-beingについて研究というか、書籍を読んだり独学で学んだりはしているんですけれども、一旦ここで言われるWell-beingの定義について、少し固めておいた方が、話題を進めやすく、この会議もよりよいものになるのかなと思いますが、その定義とかについてはいかがでしょうか。

（波田教育長）
日本語に訳すってのは非常に難しいですけれども、簡単に言うと、心も体も含めて、あるいはもう個人としてあるいはその自分の身の回りの環境、家族、友人、そういうものも含めて、良い状態にあるというような、意識かなというふうには思っています。
そのよい状態というのをさらに向上させていくっていうのが、幸福に繋がるというような視点で私はとらえていますので、今回のテーマは、どちらかというと学校教育にある程度、特化とまでは言いませんけども学校教育が主となるような内容になっていますが、そうやって考えますと、学校で学ぶ子供たちの、良い状態をさらに向上させていくということを考えていかなければいけないんではないかな、そのためには、当然教員の資質能力の向上ですとか、保護者の皆さん、地域の皆さんとの連携協力、そういうものも当然入ってきますので、単に学校だけではなく、もう少し広い意味で地域も含めた、市民全体のこういうWell-beingの向上というようなとらえ方ではないかなというに感じています。

（中西委員）
よろしいですか。中西です。
こういう計画とか目標というものが出てくると、それを、何で測るのかということが、常に問題になるわけですが、国の教育振興基本計画でも指標が納得できるものと、これでいいのかというものがあったりもするので、なかなか難しいことでもあると思いますが。
ここで今話題になったWell-beingの向上なのですけど、これを、何で測るのかということはちゃんと考えておかないと、言葉だけが先走ってしまうので、大事なことかなと思います。
現時点で例えば上げられることを、もし、伺えるなら伺っておきたいなと思います。幾つもあると思いますけど。質問でもあります。

〇本郷谷市長
事務局の方どうぞ。定量的にはなかなか難しいと思いますけれども。

〇中坂学校教育部長
学校教育部長です。
何で測るかというところで、ここでいうと市民全体のというところでありますけれども、まず、学校としてというふうに考えますと、毎年学校評価というものを行っておりまして、この学校に通わしてよかったですかとか、楽しく学校に通っていますかとか、そういうような項目もございますし、学校

はいじめに対して適切に対応していますかなんていう質問項目もございますので、その辺のところから、各学校としては拾っていけるかな、と。
同時に我々3年に1回学校の方を訪問しておりますので、そこで学校評価の内容を見させていただいておりますので、その辺のところで、状況としては確認ができるかなというふうに思いますが、市民全体のWell-beingの指針というか、測るものとしては、今後検討して参りたいというふうに考えております。

〇波田教育長
私が教育長として、今学校教育部長が学校を1つの例として、評価基準というか、評価方法ということ話してくださいましたけども、やっぱり市民全体のっていうことを、先ほど申し上げたように、すべてが学校で完結するわけではないですので、それで考えますと、市民の皆さんの健康ですとか、それから、生活水準の向上ですとか、やはりこれだけ生産年齢人口が減っていく世の中になってきていますので、今学校教育の中で学んでいる子供たちが大人になったときに、松戸市にとって、有益な、経済活動も含めて、松戸市の市民として、やっぱり有益な人材であるっていうところを考えていきますと、その時その時の、人口規模が多ければいいというものでももちろんないと思うんですけども、松戸市全体の力が上がっているかっていうのが多分、1つの大きな指標になってくるのかなと。健康で豊かな生活を営んでいる市民が多い、逆に言うと、選ばれる市であるかとか、そういうことも必要になってくるのではないか、その1つの具体的な指標が学校評価の中で、現れてくるのかなというふうに思いますので、これは教育委員会だけではなく、市全体としてどんなことで評価をしていかなきゃいけないかということは、一緒に議論していかなきゃいけないことだろうというふうに私は思っています。

〇本郷谷市長
他にいいですか。

（和座委員）
和座です。よろしくお願いします。
そのことと関連してですけども、やはり孤独感というのですかね、つまり、今本当に社会はみんなそれぞれに分断化されてしまっている部分があって、昔だったら多くの年代の方たちがみんなで住んでいたり、わいわいがやがやしているような社会だったわけですけれども、今こういうふうになってきて、単身の世帯というのは増えてきています。高齢者の方もお1人で住んでらっしゃる方が非常に多い。私もクリニックでいろいろな患者さんたちと接する中で、お一人暮らしで寂しい思いをして、それで僕のところでちょっといろんな世間話をしながらやっていくというようなことも、よく有ります。こういった孤独感みたいなものというのが、人間にとってはすごく幸福感と非常に強く結びついているというのは、いろんな調査でよくわかっているんですよね。
　前も話したかもしれませんけどもハーバード大学というところで、今でも続いているんですけども、何が一番人間の幸福と関係しているかという因子を抽出するための研究が実施されています。その中で幸福感と相関した一番強い項目が何かというと、コミュニケーションというか人との触れ合いが、その人の健康・幸福感を一番左右するというふうなことが、実はわかってきているわけですね。
　だからそういう意味で、やはり松戸のこの良さというのは、ある意味では田舎の部分・自然もたくさん残っているわけですから、そういう中で、いかに今、現代社会の中で分断化された人たちが、一

緒になりながらお互いにコミュニケーション取りながら、人間関係を持つという、このことがその人の幸福度にすごく重要なポイントになるんじゃないかと私思うのです。
　これからいろんな形でそういった場を作っていかないといけないし、子供の場合もやはりそういった孤独感みたいなものがやはり僕はベースにあるんじゃないかと思うんですよね。
例えば、人見知りというものがありますよね。あれはどういうことかというと子供が何か知らない人と会って泣いちゃうわけです。不安感で。その時にお母さんに抱き締められて、それで安心するんですよね。
ただ、その泣くっていうこと自体が、実は究極の不安の発信だと言われているんです。
大体1歳前ぐらいがその頃ですけれども、私が健診のとき抱っこして、子供がワーッて泣くと、お母さんこれ人見知りだねって。お母さんとの信頼関係ができているからこんなふうに泣くんだよっていう話をするんですけれども、そういった部分での、育児での間のその母子関係が、やっぱり今スマホだとかいろんなもの進んできています。お母さんたちも非常に疲弊している。その中で、余裕がなくなっちゃって、子供さんとの関係の中でそういった、お母さんのとこに行くともう抱き締められるんだというようなそういったところがやっぱり希薄になっている部分、弱くなっている部分あるんじゃないかと思うんですよね。
だからいずれにしても、私が言いたいことはちょっと、今漠然としていますけど、そういうふうな孤独感、そこら辺がやっぱりキーワードになっているのではないかと。
そこのところを世代の中でも、高齢者から子供まで含めて、やはりお互いにこういった流れの中で支え合えるような社会を作っていくっていうことが、幸福に繋がっていくんじゃないかなっていうふうに思います。

〇本郷谷市長
他に何か質問はありますか。

（伊藤委員）
伊藤です。
私もこのWell-beingというのが、ある業界ではよく使われているとお聞きして意外に思ったのですが、一般的にそのWell-beingは日本語として熟した言葉かなっていうのは非常に疑問に思っています。これから松戸市として外に出すような資料の中には、あまりこのWell-beingという言葉は使わずに日本語で何かうまく表現を考えていただいた方がいいのかなと思います。特に今回の資料の中にもいっぱい出てきますよねWell-beingってのは。こういうのをずっと全部読んでいると前後関係から中身は何となく想像つくんですけども、何かやっぱりもう少し日本語できちっと、たとえ少しずれるかもしれないけれども日本語で書いた方がいいのかなというふうに思いました。
それから松戸らしさという点についても、要するに松戸は、他の自治体とは違う点を出したいというのもあったのかなと思うんですが、学びの松戸モデルもそうですし、あるいはコミュニティスクールについても一般の国のとは違った、松戸版を出すとか、そういう姿勢はやっぱり人口50万の都市として、私自身は1つの方向としては決して間違ってはいないので、まず、そういう松戸の独自性というか、他の自治体とはちょっと違うぞと、さらに考えて、付加価値をつけてこういうことをやってますよという意味で、何か教育面でもいろんなものを出しておられるということは私自身としては賛成ですし、

これからも、無理して背伸びすることはないと思うんですけれども、いろんな独自性を出すという意味で、松戸らしさと呼んでいいのかなというふうには思っています。
以上です。

〇本郷谷市長
もう議論に入って結構です。

（武田委員）
今皆さんのお話を聞いていて、やはりわざわざ松戸らしさという言葉を使うというのは、何かキャッチアップして欲しいという思いがあってのことと感じます。
現実に進められている施策などをずっと拝見しますと、非常に地道に実直にきちんと事を進めていて、決して、子育てするならどこどこ市とかいろいろ聞こえてはきますけれども、松戸がそれに大きく遅れていることをしているかと言ったらそうではなくて、考え方の方向性が違うから違う施策の取り方をしているなどの明確な、自分たちの、進め方の理論というのはきちんと、常に進んでいるので、松戸らしくきちんと進んでいるなという感じを受けております。
だから、何にも心配はしてないし、ただメディアに乗りたいとかそういうイメージだとちょっと違うのかなという気はします。
すいません本題に入ってよろしいでしょうか。

〇本郷谷市長
はいどうぞ。

（武田委員）
これから進めていくことの中で、課題というよりは、どうしていこうかという前向きに推進したいことの中で、つい先だってまで議論で話題になっていた文化スポーツ政策課がようやく発足し、これから遂行していくというところと、博物館のリニューアルが決定しているというところ。それから、図書館整備計画もかなり具現化して、そろそろ本腰を入れていくというところで、これからの近年というのは、大きな箱物などを踏まえた変わり目に来ているのかなと思います。一番大きいのは松戸駅周辺の再開発というところが、何か新しいことが起こるとやはり、市民をはじめ、近隣のお住まいの方たちも、何か変わったのかな、新しい図書館ってどんなのかな、新しい計画、整備ってどういうふうに変わったのかなと。当然、注目を集めるということになるのですが、今まで足りなかったことがここで一気にできることがあると思っています。なかなか連携というのが進まない、どうしても分断しがちになるところが、同じ時期に、こういう計画が進むということで、一番連携しやすいスタートになりうるのかなと、大きく期待しているところはあります。
今年発足した文化スポーツ政策課というものが中核となって、本当の意味で連携のハブになって動いてくれたら、ちゃんと見据えてくださるところがあるということが、これからの松戸市らしさ作りの要になるんじゃないかなというふうに期待しています。

〇本郷谷市長
どうぞ意見でも結構ですし、新しい課題ということでもいいし。

自由に議論していただいて。

（和座委員）
各論になってしまうのですがよろしいですか。
今実は5歳健診っていうのが始まろうとしています。
このことに関してのお話なんですけれども、不登校だとか、いじめとかっていうものについて、いろんな切り口があるんですけども、1つの切り口として、その子供さんの中にね、発達障害なり、ボーダーラインって言われているような子供たちがいる。そういった子供たちに対してできるだけ早い時期にしっかりとした取り組みをしていくことが重要じゃないかというふうに言われている。
もちろん一方で、ＡＤＨＤだとかいわゆる多動行動をするような子供たちとかあるいは自閉的な子供たちもいるわけですけれども、そういうお子さんたちの中には非常に優秀な能力を持った子供たちもいる。ということで、一概にそれをその病気というふうに扱っていくんではなくて、やっぱりそういったものの中から、いかにその子供たちの能力を伸ばしていくかという視点が非常に重要だと思うんですけれども。そのためにはですね、つまり、小さな子供の頃、2歳3歳、保育士が関わっているような時期から、様々な行動に関しての情報ってのは、保育士がある程度掴んでますよね。
そういった人たちの意見も入れながら、あるいはアンケート調査をしながら、5歳児健診というところでそういった発達障害をピックアップしていこうじゃないかっていうのが1つの考え方なんですけども。
　そういうふうな流れの中で、支援学級だとか、あるいは通級というんですかね今、そういうふうなボーダーラインの子供たちを見ていくようなそういった場所が学校にあるわけですけれども、そういったものだとかですね、それから例えば学校になかなか来れない子供たちが保健室に行ったり、あるいは場合によってはほっとステーションみたいなところで見ていくとか、様々な取り組みがあるわけです。
だからそういうふうな流れの中で、子供たちをどういうふうにして、ピックアップしながら、そういった問題を持つ子供たちの能力を学校の中でまた多様性のあるいろんな施設の中で、伸ばしていくっていうことが、今非常に重要になってきているんじゃないかなというふうに思うんですね。
　そこで私がちょっと指摘したいことは、今までは小学校や中学校というのは、教育委員会にあって、ある程度しっかりとこう見られていた。ところがですね、子供がその小学校に上がるときに、なかなかそこでちょっと断絶があるんですね。
それは例えば僕自身がその子供たちを見ていると、非常に強く感じるんですけれども、例えば、一般的に言って予防接種のことなんかでも、はしかの予防接種してない子がいるわけですよ。
そういうような情報が小学校に上がってなかったりするんですね。そういう、いわゆるその部分での断絶ですね。
　それから中学校卒業した後高校に行く、そこの段階で、中学校や小学校のときの教師の先生たちの不登校等に対する取り組みの情報が、消えてしまうんですね。高校の先生のところにその情報が伝わってない。
つまり保育園・幼稚園の幼児から、小学校中学校の児童・生徒、そのあとの卒業した高校・大学の学生、そこら辺のところの繋がりをいかにシステム化して、情報共有しながらやっていくかということがこれからの大きな課題じゃないかというふうに僕は思っていまして、その点について今後もっとしっかりとした形でやっていくのが重要じゃないかなと思います。

特に5歳健診というのは今、全国の中で、いろんな様々な動きが最近ようやく出てきています。
小児科の学会でも、昨日もちょっと話したんですけども、やはり小児科学会の中でもそういった発達障害に関してのガイドラインをしっかりと作っていこうというふうな流れも出てきています。来年あたりにはそういったものが出てくるそうなんですけども、私たちも、その動きに注目しながら、子供たちを見ていきたいなと思っているんです。さっき言ったような縦割りになっては絶対いけないわけで、これからのシームレスな取り組みに僕は期待したいし、それから、十分にこれから見ていかないといけないなというふうに思っています。

（山形委員）
和座先生のお話を受けて、とても近いような意見が出てくるかと思いますが、子育て支援を今年で17年させていただいていて、全然変わっているこの子育ての風というのを日々感じています。
先ほど、人口データをちょっともう一度見させていただいて、私には娘がいますが、娘が生まれた頃は、赤ちゃんが松戸市は4400人生まれていたのが、2023年で1896名と、数百名以上も減っている現状、また子育て支援の本当に現場で皆さん、保護者の方は、安心して通ってくださっていて、各地域に「ほっとるーむ」が増えて本当ありがたく思っています。けれども、そこに来られる方もどんどん変わってきています。実を言うと、もう0歳のときにしか来れなくて、もう1歳になったら、仕事に復帰してしまうので、平日来れなくなってくる。
一方親御さんも、保育園に入れた方が、まだ働く気がないけど入れた方がいいんでしょうかというような不安感みたいなのも出てきたり、本当に多様化していく中で、お子さんたちもすごく多様になっている。先ほど和座委員が発達障害という言葉を使われていて、神経発達症と今、名前も変わろうとしていく中で、お子さんの発達に関しては、かなり変化が見られるこの数年だなあというのを現場にいても思いますし、それっていつからかというと、もしかしたらお腹の中から、もう授かった時点から、何かサポート、それこそ日本の妊婦さんというのは、他国よりもすごくやせているので、日本は世界で一番赤ちゃんが小さく生まれる国だったりもするので、その影響なんかもあるのかなと思ったりもします。そういう部分の中での子供一人一人を大切にする、この第四期教育振興基本計画の中にもある誰一人取り残されないとか、継続的に見ていくというところの視点は、私は和座先生と本当に同じ意見を持っていて、学校に入った瞬間断絶する、それこそ保育園、幼稚園との小学校連携とか、あとは逆に言うと、はっきりとしたグラデーションがある子に関しては早くからサポートが受けられるんですけれども、気がつかないで、何もサポートを受けないで学校に入ってすごく困るっていうことも、結構現象としては出てきているのかなと思います。その辺も、もう長期に渡るような子供のサポートの部分を、とにかく強めていくことが大切なのかなあというのとか、松戸は、私ももともと出身が違うのですが、先日も引っ越してきます、最近引っ越してきたんですっていう方に、大体月に1人は会います。その中で、松戸はこういうことはいろいろあっていいですねと言われたりするんですけど、頼る人がいなくていらっしゃっているので、そういうところでも教育になった途端、子育て支援はよかったんだけど教育になった途端、頼るところがあんまりなくなってっていうところは、現実的にはあるのかなと思うんで、この目標2のところにも繋がっていくのかと感じて、和座先生の話を聞きながら私も思っていました。
教育振興基本計画も見せていただいたときの目標2の豊かな心の育成の中にとても大切なことが書いてありました。
自分の良いところがあると思う生徒の増加。

これまさに、市民の方が自分のいいところがあるっていうふうに思っていただくっていうのは、ぴったりだなと思いました。割と子育ての、講義とかもさせていただく中で、子育てに自信がないとか自分なんてっていう思う方がいらっしゃる中での自己肯定感、でも子供の自己肯定感は高い方がいいってよく言われたりしますが、親御さんの自己肯定感のアップなんていう言葉もありますし、その自己肯定感って結構強い、あげるのは大変なんです。
自己肯定の前の自己受容感、自分はどんな人間であり、でも大丈夫みたいな、自分を受け入れるというところが、Well-beingに実は繋がっているのかなあというところを、今話したいなと思ったところです。
また、先ほど波田先生がWell-beingについてご説明いただきましたけれども、私もほぼ同じ考えなんですが先日、慶應義塾大学の前野先生が、Well-being科という学科がある武蔵野大学の学部長をしていて、日本で一番Well-beingという言葉を2016年ぐらいから持ってきてお話している前野先生がすごくシンプルな言葉で言っていました。心が良い状態、という話をされていました。そのときに、体が病気があっても、社会的に難しい環境であっても、心がいい状態であることというのをWell-beingの定義みたいな形でお話をされていました。その心の安定みたいなところが先ほど和座委員の言った孤独感がないとか、何かそう安心する、心理的安全性という言葉はここには載ってないですけれども、心理的安全、ここのまちに暮らして安心、この学校に通わせて安心この保育園に行かせて安心、この広場に行って安心のような、安心安全というところがすごく大切になってくるのかな。それが結果、1の市民全体のWell-beingの向上になるのかなあというところを感じました。
またこれ補足なんですけど、Well-beingって測ることはできるんです。
それこそ前野先生のWell-being診断とやると、個人で、点数が出る。
30項目ぐらい質問に答えると、パーセンテージ、どのぐらいあなたは、Well-beingがこういう状態ですっていうので出してくれるような、今科学でも少しずつ評価ができるようになってはきているので、そういうものもうまく活用しながら、それこそ教育ＤＸを活用しながらWell-beingの向上を図っていくというところが、もっと拡張していくのがいいのかなと思いました。
また、長くなりますが、この中の話題に出ていないですが、気になるところとしては、学校教育は教育委員会でやっていますが、その続きの学童保育と、放課後キッズの現状についてとか、あとは中高生の居場所の利用率だとか、満足度だとかというところは少し気になるところです。
あともう1点、子供たちを幸せな状態にしていくというところの観点でいうと周りの大人がやっぱり笑って安心して、ニコニコしている大人がいると子供は安心なわけなので、先生たちの幸福度とか、先生たちの働きやすさというのが、実は教育にすごく影響を与えているのではないかなといつも考えています。その部分や、私たち子育て支援の現場にいる者も、大人の保護者親の笑顔がやっぱり子供の笑顔の支えになっていく中での、保護者に向けての心理教育的なものとか、チアアップするような、元気づけるようなイベントはたくさん今、起きてはいて、松戸ってイベントが　多いと思います。松戸まつりでもNPOママキャンも出展してとってもいい部分があるんですけど、そういう結果どうだったかみたいな評価のところは、見えづらいんですが、大人の幸せに関するような生涯教育の視点になりますけど、そういうものもどんどん発信していくと良いのかなと思ったりしました。
最後にＳＤＧｓっていうのは、今、2024年であと6年、実を言うとその次はどうなっているのかなというと、ＳＷＧＳになりそうですっていうのが、今年の夏ぐらいに、これは一部の検討会で話されたことなんですけど、サスティナブルウェルビーングゴールズ、ここにもWell-beingという言葉が出てくる。

それこそ先ほど、伊藤委員がおっしゃった通りWell-beingという言葉は曖昧なのかもしれないですけれども、でも、サスティナブルって言葉を使っていったら浸透したようなところもあるのかなと思いながら、聞いていました。

（中西委員）
今の山形委員のお話とも関連するのかもしれませんが、Well-beingって言葉は、確かに最近よく使われて、でもよくわかりにくいなということもあると思うんですけども、この言葉が掲げられることによって、何ていうか、いろんな視点で幸福感を考えるということが広がっているという気はするんですね。
先ほど部長が学校評価を例に出されましたけど、いろんな視点でこれがこう評価できるんだ、あるいは測れるんだということを考えることが、特に学校の先生には必要なのかなと思っていて、こういう視点でもこういう視点でもあるという、その子供たちの幸福度がどうなのかっていうことを考えるということが必要なんだろうなと思いますし、先ほどどなたかおっしゃいましたけども、国の計画でも、子供のWell-beingのためには、教師のWell-beingがよくなければ駄目だという話もしっかり出ていますので、それを全体で考えていかなきゃいけないんだろうなということを思い起こさせる言葉だろうなというふうに思いました。議題1の資料でいうと、新しい学校施設づくりというところとも関連してくるのかなと思います。それは、学校訪問行って、常に感じるのはですね、今40人から35人になる、小学校は35人になりつつあるので、少しは大丈夫なんですけども、この教室でこの人数、昔はもっといたんだよねっていうこういう、環境ってずっと変わってなくていいのかということは常に感じています。
そういう意味で、学校施設を新しくつくっていく、あるいは改装でも同じかもしれませんけど、こういう学習空間がもう少し今と違う自由度の高いようなものになっていけばそれがその学校通うこと、つまり、子供たちのWell-beingが向上していくことにも繋がっていきますし、真ん中の教育ＤＸの中に項目として挙がっている不登校も減っていくのかもしれないので、これ3つそれぞれ関連しているのかなというふうにも思いました。
以上です。

（武田委員）
いろいろお伺いして、それこそ学校の再建というのもこれから老朽化していく中で、大切なことですけれども、そうすると当然今までのような形ではなくて、いろんな地域との繋がりの場であったり、あるいは複合施設化するとか、そういうちょっと今までとは変わった形で、学校というものが存在し始めるのがこれからなのかなというふうに想像するんですね。
そう考えたときに、先日、松戸の市の美術展のときに、コロナ明けでようやく中学校の美術部との連携という形で、展示がされていて、久しぶりの景色だなと思って拝見させていただきました。あれは、声をかけられたからやるというだけじゃなくて、見に来た子供たちが大人になってもこうやって楽しんでいるということを、漠然と知る場でもあるとおもいます。平素は意外と子供だけの環境の中に埋もれがちなところを、いろんな公共施設を通してとか、あるいは、例えば学校の建て替えなどで、近くに異世代がいるという状況が、どんどん発生していくところで、笑顔かどうかはわからないですけれども、笑顔じゃなくても、きちんと稼働し、様々な動きをしているところを見ることはすごく子供にとって、漠然とした目標になるのではないでしょうか。例えば博物館での企画の博物館アワードで

研究材料とかを見つけ出して、おそらく夏休みいっぱいかけて作っているんだろうなというものが、例えば何だろう、どこかでそれがノーベル賞ってちょっと大げさかもしれないけどそういうものと全然繋がってないわけじゃなくて、研究ってそういうことから発生するんだよっていうのを、何か大人社会の出来事と子供時代の中でやることをきちんとつなげるきっかけを多く作ってあげるということが、実は非常に大事なのかなって思うんですよ。別にそこに決して笑顔なんか発生しなくていいんです。知る喜びというのもあると思います。例えば絵を見ても、笑顔を描書いているわけでもないし、険しい崖の風景とかを描書いているかもしれないけれども、かっこいいなと思ったりすごいなと思ったりするのもWell-beingでしょう。例えば、体育館でスポーツを楽しんで使われている近くに学校施設があったとしたら、大人になっても遊んでいるんだなって思って、何か微笑ましく見ることで、楽しみを見いだすことはどこにでもあるということを知る。知るチャンスを、とにかく多くするっていうことが一番大事なのかなと思います。これからの施設は、多世代が違うことをしているのをそこはかとなく見ること、触れることができる、そういうチャンスをふやすことが、Well-beingを見出すきっかけになると思います。例えば、いじめとかって、何かひと口に言って消えるものではないと思うんだけれども、ここに居場所がなくても、違うところで、自分が楽しく過ごす場所が見出せれば、自殺しようとは思わないっていうぎりぎりのところで救われるかなとか、早く大人になりたいなと思って、辛い現状をやり過ごそうと考えたりして、ある意味ちょっとゆがんだ前向きかもしれませんけれどそういう気持ちになる子供もおそらくいると思う。
そういうふうな、ちょっと視点をそらして違う世代を眺めて、それも1つの楽しみのあり方だなっていうもののサンプルをいろんな形で見せて、いろんな松戸市内の施設に出向くとかイベントに参加するのもその1つだと思うんです。Well-beingっていうと何かすごく華やかな感じがするんですけど、日々が一番良いなと思うくらいがちょうどいいような気がしますね。

（和座委員）
ちょっとよろしいでしょうか。
また別の視点でお話すると多様性ということがあって、それとあと松戸のその特徴というこの2つ考えたときに、伊藤委員からちょっと僕聞いたんですけども、松戸ってのは非常に外国人が多いというお話ですよね。50万都市の中でも非常に全国的にも外国の方が多いと。
これはある意味では、僕は1つの強みではないかと思うんですよね。
最近テレビで見ていたらガザとイスラエルの若者たちが議論する場面があったんだけども、もう本当に憎しみあってるわけですよ。
だけど、その中で若者たちの中で、やっぱり人として命っていうのは大切だよね、だから大切にしないといけないっていうふうなことをお互いに言っているのを聞いて、何かちょっと光を僕感じたんだけれども、多分そういうふうな意味でも、いろんな人種の人たち、例えば僕のところも確かに、最近ベトナムの方も多いんですよね。いろんな人たちがおいでになって、ナイジェリアの方もこの間来ましたけど、もう本当に1割ぐらいは私のところ、外国人が多いんですけども、彼らといろいろとナイジェリアの話をしたり、あの人はどこなんだろうってなんて言ってね、そういうようなこと言って、キャピタルがどうだとか言ってね、彼らは、結構日本語ちゃんとしゃべってくれるので、僕は普通通り日本語で応対したんですけども、そういうような形でですね、非常にいろんな人たちとのコミュニケーション取るっていうことがすごく重要じゃないかなと思うんです。

松戸の場合もそういった人たちがいるわけですから、彼らの文化を我々も知る必要があるだろうし、いろんな意味で交流会っていうか交流する場を、松戸でどんどん作っていったらいいんじゃないかな。そんなふうに思います。その中で、本当にいろんな文化がたくさんあるんですね。僕も聞いていると楽しくなってくるんですけど。
そういう何か、全く知らないような文化の中でいろんな語り合いをすることで、人としての何かこう、多様性というものについての見方っていうのは育っていくと思うし、だから子供さんの場合でも、小学校でもたくさんそういったお子さんが、今いらっしゃいますので、ここに日本語教育っていうのがちょっと出ていますけど、外国人児童生徒への支援というのが学びの保障の中に入っていますけども、この部分をもっともっと膨らましていくと、彼らに対して日本語を話すだけ、日本語を勉強してもらうだけじゃなくて、僕らの方で、彼らのそのいろんな持ってる文化を知るという、お互いの双方向同士の取り組みってのは僕非常に必要じゃないかと思うんですよね。
あんまりこうこっちの方に、あんたここ日本に住んでいるんだから日本語ちゃんとしゃべらないといけないよと。ていうのはもちろんそうなんだけれども、逆に彼らから、日本とはちょっと違うようないろんなことを聞くと、ええと思っちゃうんだけど、そういうことを聞きながら、またもそれなりに楽しむこともできるわけですから。そういったお互い双方向の気持ちを持ちながら交流できればいいなあって、せっかく松戸はそれだけ多くの人たちがいるわけですから。
ぜひそういったことをやっていただくと、僕は教育もいろんな意味で広がっていくんじゃないかなと思います。

（山形委員）
不登校についてのことも、教育ＤＸの学びの保障のとこで不登校児、児童生徒への対応というところで、不登校支援についても、まだまだ行き届かないところ、学校現場が今すごく人手不足になっていて登校している生徒さんへのサポートで手一杯になっていて、少し前ですけど、不登校で別室登校している生徒さんが、見てくださる方がどなたもいない時間があると伺ったりしました。私が保護者で学校にＰＴＡ活動で行ったときに、保健室登校の様子をみかけました。保健室登校って本当は保健室は体調が悪い子が行くところで感染症とか発熱とか嘔吐とか下痢とかが起きたときに行くところを、心の元気がない状態の子がいるっていうのはちょっと違うなっていうところがあったりして、確かにその養護の先生がその子にとって心理的安全安心な方であるっていうのはあるけれども保健養護の先生自身の、業務に支障とか、そういう部分の中での不登校支援は、各学校いろいろ様々な取り組みをしていると思うんですけれども、学校だけに任せないでそれこそ学校再編のところで建物を新しくするのではなくて、学校の中身自体をある意味、公的なフリースクールを構想してみるとか、広島県でイエナプランというのを導入して、子供たちが時間割を考えて、対話的にリビングルームみたいなところの配置をして、考えて学び合うとか、そういうような学び方、不登校の子たちが行けなくなったこと自体をネガティブにとらえるのではなくて、その子はじゃあどうやったら安心して安全に学び続けられるかというところでの、何かしら新しい学校再編とか、新しい学校のあり方とか特例的なものを研究的なものでもいいので、少し今人数が減っている学校とかがもうあるので、そういうところで、大阪のみんなの学校というのが結構有名で、公立学校でも、神経発達症の子とかいても、もうすべて同じ教室で学ぶような、そういう独自の取り組みもあったりもしますけど、そうではないような、何か新しい不登校支援サポートみたいなものがもっとできるといいのかと思います。今現状不登校支援は常盤平、古ケ崎の2ヶ所だと思うんです。松戸はすごく広いので、2ヶ所では足りないし、もしアク

セスが割とよければ、松戸の駅とかの周辺とかで気楽に通えるようなものとか駅の近くだと割と保護者の方っていうのは車使えなくても動けるのかなと思ったりはするので、何かしらそういう新しい不登校支援対策についても、今後考えていていただきたいなというのをもう心底思っている部分です。

先日、中学校に行ったときに、理科の先生がオンラインで授業をつなげていた様子もあったので、オンラインが上手に使える子なんかはその教育ＤＸみたいなところでできるのかなと思ったりもしますし、家庭の中で学んだことも評価の対象になるような文科省も動きが出てきてはいるんですけれども、何より先ほど和座委員が言っていたその孤独感みたいなところというのが、不登校の子と、不登校の保護者の方というのがすごく抱えがちなので、多くの方が独自で自分たちでフリースクールを見つけたりとか、もしくはどこにも繋がっていない子が、先日の文科省の話では4割ほどはどこにも何も繋がってない現状です。学校に行けなくなった理由は様々ですけど、学校が、やっぱり何かいじめだとか何か、それは詳しくわからないですけど、学校に不信感を持っているから学校が幾ら電話をしても、出られないとかっていうようなケースもあったりするからこそ、この第三者的な場所というところのような市と協力したような、不登校って言葉自体もよくないですよね、なんかこう、もっと別な言葉になって欲しいなといつも思いながら考えてはいるんですけれども、学校に行けなくなっても、行けなくなっている子の大半は本当は行きたいし、行かなきゃいけないとすごい重々わかっていて、本人たちもどうしていけなくなっているかもわからないみたいなところが多いところもあるとは思うんですけど、そういうところで、何かあってもここがあるよみたいな、そんなようなものが、あるといいと思います。今、おやこDE広場が28ヶ所ある中で、子供の居場所というのが松戸市内で小学校中学校の居場所がすごく少ないっていうのは、市長もきっと課題と感じてらっしゃると思います。その中での日中の居場所というところの中での、何か取り組みっていうのはこれからニーズとして必要になってきますし、あと働く親御さんが多いので、やはり子供が学校に行けないって言ったときに、どうしよう仕事に行けないとなって、何かのデータで見たんですが、子供が不登校になったらその世帯収入が減るというデータを見ましたので、安心して親も働き続けられて、特にシングルのご家庭は、低学年の子が休んだりとかしたら、その親が働かないと収入が得られなくなりどんどん苦しさを増すようになってくるので、何かあったらすぐにそういうとこに接続できるようなものが広がっていくといいなと思います。教育委員会だけではできないと思うので、市も協力しながら何かしらのものが広がっていてくれると、これからはいいと思ったので、今お話させていただきました。

（伊藤委員）

今回の教育施策の課題ということで言えば、松戸市の教育行政について、私も何年間か外からも、中からも見せていただいているのですが、全般的にきめ細かい施策っていうのはいろんなところで行われているので、私自身もそれは自信を持って対応していけばいいのかなというふうに思っています。ただ、1点ちょっと気になるのは、松戸市でよく市長も中心にやっておられる、例えばオリンピックに出た選手を顕彰したり、そういうのをいろんなとこでＰＲされているのは、非常に市民にとってみると励みになるので、非常に皆さん歓迎しておられるんだろうと思いますが、それを教育という観点から言えば、何かもう少し、積極的に日本全体で、リーダーシップをとれるような人材を育てるとか、ある分野の何かリーダーになるような人材を育てるような、そういうことに重点を置いてやっていますというようなことが言えるといいなと常日頃思っています。

そういう観点からいうと今の子供たちに、非常に欠けているのは、直接リーダーシップとかそういう人材には繋がらないかもしれないんですけども、いわゆる自己肯定感が非常に低いんですよね。これは別に松戸だけのことじゃないんですけども、今の日本人の子供たちが、そういう自己肯定感が低いっていうのもやっぱり外国人から見ると極めて異常に思えるということで、それを何かもうちょっと自信を持って自己肯定感を高められるような指導を先生方がしていただけると、子供たちの自信にも繋がって何かある分野でやってみようとか、そういったような気持ちになることが多いんではないかなというふうに思います。そういう点の教育の方向性としては間違ってないと思うんですけども、その中でちょっと、今言ったような点をもう少し注意してやっていただけるといいのかなというふうには感じました。
それからさっき外国人の話題が出たんですが、松戸の外国人に対する日本語教育支援ということで言えば、まだまだやるべきことはあると思うんですけれども、最近ではにほんごルームを作ったり、非常に個別のアテンションを払ってやってきているので、むしろそういった施策が外国人の方にも受けて、むしろだからこそ外国人が多くやってくるという、そういう好循環と言っていいと思うんですけれども、そういったものがあるのかなというふうに思います。そこで、できれば市としては、そういう増えてきている外国人を松戸市の中でうまく使える、あるいは役立ってもらえるような松戸市の経済の向上に繋がるような形で、貢献してもらえるような策を、これは教育委員会とは直接関係しないんですけども、産業振興という観点から、外国人の活用をどうするかというのをもう少し注意してやっていただければなというふうには思っています。
以上です。

○本郷谷市長
ほぼ1時間、いろんな意見をお伺いして、僕もちょっと感想も含めてお話ししたいなと思います。
今言った伊藤さんが言われたような、例えば1つの人材を育てるやり方とか、ターゲットを1つはっきり持ってやってく。それ以外にも何でもいいんですけど、こだわる必要ないんですけど、そういうものを、非常に良い提案だと思うんです。
外国人の問題についてはご存じのように今、日本の人口1億2300万人が、あと何年かしたら1億人を割っていく。こういう社会で、今出生率が1．幾つだということを考えれば、10年、これもう人口推計って、大体、そんなに違わないわけで、10年20年間違いがないんでその先は別として。
そうすると、今言ったようないろんなサービスができない、学校の人が足りなくなっちゃう、お医者さんも足りなくなるし、その足りなくなったサービスができなくなっている社会を考えると、やっぱり、外国人も、まちづくり、もう戦力っていうとおかしいけど、一緒になってまちづくりに入ってくるような社会を想定して作っていかないと、これからのまちづくりは、前に進まないと。
だから、今外国人が2万人ぐらい見えますけどね。多いといっても飛び抜けて多いわけじゃないんですけども。ただ、その人たちの日本でのいろんな課題を、例えば川口でいろんな課題なったりしていますけど、そういうものを変えて解決すればいいというそういう問題じゃなくて、そのマイナスで課題があるからどうだこうだという、日本語学校で日本語を少しちょっとやりましょう、そんな程度の話じゃなくて、もう完全にしっかりとした、外国人が松戸に住んでいただく環境を作っていくということを今後やっていかないと、街の発展はないというふうに思います。
従って今も、市の政策の中で、議論の中で、そういうテーマを1つ、みんなで議論してもらっているんですけども、そのために外国人が日本で日本語学校をしっかりやって、しっかりとした教育を受けて

しっかりと学校、仕事について家庭を持つ、そのための支援をしていくとか、そういう政策も含めて、今いろいろ検討しています。
そういう意味で、もっともっとこの分野はしっかりとやっていかないと。さっき双方向の議論ありましたけど、まさに双方向の議論でやっていかないと。特に日本ぐらいこれほど、外国の人が中に入って来れない国ってのはないわけで。ヨーロッパ行けばもう自由に行けるわけだし、アメリカは移民の国だし。ほとんどがみんなそういう国だけど、日本ってのは歴史的、地理的な問題あってこうなっていますけど。
やっぱり単独だけでやっていくのはなかなか難しい時代に入ってくるかと思うし、松戸市もそれを前提で考えたらまちづくりはできないなと。一緒になってまちづくりをやっていく、そういう社会を作っていく必要があるとなると、従来の考え方を変えてやってく必要がある。
それから不登校の問題も、やっぱり何が問題かと言ったら、学校行かないことが問題じゃなくて、学校行かなくたっていいんで、将来、社会で活躍できる本人のやりたいことがやれるような人になってくれればいいわけで。
人はその人の能力も違うし、置かれた状況も違うし、思いも違うし、それぞれに合ったような教育というか、その人の能力を伸ばすようなやり方をしていく必要があるというというふうに、まずベースとしては思っています。
昔はやっぱり日本というのは、子供子育ては家庭、教育も基本的には家庭で、それを学校の教育、学校で一部補完していくということで、ベースは家庭が中心で子育てというのが、責任も家庭、こういう感じだったわけですけども。
社会そのものが変わってきてそれじゃやっていけない社会になってきているわけで、社会で子育てを、要するに、家庭での負担を減らしていく社会を作っていくっていうのが我々の使命だとこんなふうに思っている。だから昔であれば、教育委員会は学校での教育をしっかりやれば帰った後は家庭の問題だと、あるいは小さいところは家庭がやっているんだと。
もう要するに、教育委員会も非常に学校の教育のところに重点が強く入っていて、それ以外のところにほとんど無関心だと、こういう社会でも成り立ったわけだけど、やっぱりこれからの社会を考えたら、教育、それだけじゃ成り立たなくて、生まれる前からずーっと子供のちっちゃいところから、切れ目ないわけですから子供の成長というのは、小さいうちから小学校中学校高校まで社会人になっていくまで間をどうやってバックアップしていくか。これが我々の課題だというふうに思っているんで、小さいうちからだんだんだんだんと我々一生懸命いろんな場所づくりとか、あるいはいじめの問題虐待の問題とか含めながら、いろんな手を打ってきてますけども、なかなか個々の課題だけでも難しいものがたくさんあります。
その中で1つは不登校の問題あるんですけど、もっとオープンに変えたらどうかと思っているんですよ。教育委員会ってのは何も公立学校の小・中学校担当じゃないんですよ。子供たちの全体を担当していかなきゃいけないわけで。その人たちが松戸のどこかの私立に行っていても、あるいは市外の学校に行っていても、あるいは高校生になっても、バックアップしてあげないといけないわけで、そうなると、さっき言った不登校の問題ももっともっと広がった視点で見ていく必要がある。
だから従って、先ほど横割りの連携って問題があったり、まさにこれが大変重要になってきていて、従来は、それぞれやっていれば済んだんですけども、今言ったように、切れ目のないわけで、切れ目ないところを縦横いろいろしていかないといけないわけですから、それを今市でやっているのは教育委員会と子ども部で主として担当をしているわけで。

そこの連携はやっぱりもっともっとやっぱり、先ほど言った切れ目の問題があって、小一ギャップの問題があって、これはいじめ虐待については、1回松戸市も深刻なことがあって。小学校に行く子供の健康診断に来ないから、学校の先生が、教頭先生が一生懸命家庭訪問してなかなか会えなかった。
だけど、3月4月で転校してしまって、別の学校にいったということで、教育委員会としてははたらきかけできなくなったと、ここで対応が終わってしまったのだけれども、6月ごろに虐待で亡くなってしまった。こういう課題があって、市としても、この虐待問題について小学校、教育委員会と、それから子ども部との関係の間を、もっと連携とってやらないといけないということ、あるいはＮＰＯの方々含めて、全体の会議を立ち上げてしっかりした体制を組んでいきたい。
ここにやってきた経緯はあるんですけども、そういう意味で横の連携、要するにさっき言ったように、教育委員会と子ども部は、子ども部が保育園やったりとか、だからそうじゃない。もう全体がやらないといけないんですよ。僕の一番の不満は、なかなか全体を見てくれる人がいない。
どこでもそうだと思うんだけど、まだまだ広がりを持ってやろうとしているんだけども、その合間が繋がりとか横だとか、教育委員会の人が、学校終わった後の放課後児童クラブだとかキッズルームでやっていることとか、どこまで関心持ってフォローしているのかと。僕はもっとは見てもらいたいと思っているんだよね。
子ども部か教育委員会で子供をもう見ていかないといけないわけですから。
切れ目なく、お互いに一体的にやっていかないといけないわけですから。
ということで、さっき言ったように世の中が変わってきて、子供の子育て、あるいは教育というのは家庭だけに任せていてという時代から、やっぱり社会で相当バックアップしていかなきゃいけない社会になってきているわけだから。
そのためには、今言ったようなまさに横の連携で、それぞれがもっともっと、皆さんももっと言ったら、市立松戸高校の生徒だけじゃなくて、松戸には高校生がたくさんいるわけで、その子たちがどうなっているのかということをもっと理解してもらって手を打って欲しいし、不登校でたくさんいるんだったらそれは教育委員会のテーマでもあるんだっていうふうには思って欲しいし。というのが僕の思いですね。
今日いろんなテーマがあって、例えば、朝学校に行く前までの問題があって、学校行くまでは保育園とか長く見てもらったんだけど、学校に入っちゃったら、仕事辞めないといけないようになっちゃうと。要するに朝子供をずっと早く出すわけにはいけないということで、今年から一部学校で、シルバー人材センターにお願いして、学校を朝早く開けて、子供たちが入れるようにして、バックアップして。来年の4月には全校やるということは言っているのだけど。ちょっとここら辺が今どこまで進んでいるかわからないけども。
いろんな課題があって、それも教育委員会の問題だと思ってやって欲しいと。要するに、切れ目なくね。
だから今日作って皆さんもまた同じ問題意識持っているなと思ったのが、もっと横の連携をとったらという話が、まさにそれが必要な時期なので、できたら子ども部と教育委員会で1つ、共通の会議体作ったらどうかなと思ってね。お互いに子供という視点で、フリーになんでも話すというような会議体を作って、テーマをあげてお互いにやっていくということが必要かなと。
今は連携取りながら、昔と比べて非常に良くなってきたと僕は思っているし、いろんなことをやっていただいているなという感じはしているんだけども。

さっき言ったように、保育園、幼稚園でいろんな課題があったときに、学校に入ってもちゃんと繋いでいけるようにしたらどうかと言ったら、個々には繋がっているところもあるかもしれませんけど、やっぱりもっとシステマティックに繋いでいくとか。ということを考えるとお互いにもうちょっと連携取りながらやっておかないと、大体同じ問題意識を持っているのだと思うんですけどね。そこをですね、できたらもっと横の連携をしっかり取れるような形にしていただければなとそんな気がしますね。
もうそういう時代に入ってきている。
お互いにもっともっと掘り下げないといけないという感じになってきているので。できればいいのかなというのが今日の感想ですね。
個々の問題はいろいろあって、学校の施設の問題についても、とりあえず公共施設というと半分は学校施設なんでね。学校施設をどうするかっていうのが、市の公共施設問題の半分を占めているってことで、費用も大変かかるし、国の支援とか国の制度を利用しないと、やれないぐらいの規模で、それを利用しながら一応今、どっちらかと言ったらリニューアルしながら、使いながらやっていくことになっていますけど、これでやれるというのは目途がついているわけですから、それを踏まえながら、さらにどうしていくかって議論をやっていく必要があるし。
それから先ほどあった地域との関係なんかも、ここに書いてあるオープンにやっていくっていうのは、大変必要だというふうに思っているし、地域ごとに市民センターとかいろいろあるんだけども、お年寄りの施設、市民の一般的な方、子供たち、などみんなバラバラに作っているから、それぞれが線を引いているみたいになっちゃっているからね。そうじゃなくて、各地域で小学校単位で45校もあって、各地域の中心にあるわけだから、誰でも通える場所ですから。そういうところを中心にしながら、小学校、中学校を中心に、公共的な施設を入れながら、そこがオープンな、人の、その地域の集まりの場所みたいな形というのは、方向としてはね、議論をみんなでしていて、具体的にはこれからの話だと思いますけど。
個々についてはそういう議論もしているという。
そういうことで、不登校みたいなフリースクールみたいなやつをもっとしっかりやって欲しいなという気がしていますね。
何も悪いわけじゃなくて、そういう人もいるわけで。そこでまたいろんな能力を発揮して、それぞれの道に進んでくるんだろうと思うので。そういう多様性という意味でね。
市松も昔の一般的な入試から変えてもらって、多様性ということで、何かすぐれたものでこれやりたいという人が入学できるような学校。そしてそれを伸ばせるように、学校に入ってからも自分で選べるように、ということで徹底的にやってくれという形で、入試制度変えてやってもらっているわけで。これも一定程度まで成果が出てきているとは思いますけども、もうそろそろまた次のステップに入っていいかな、そんな気もしているんですけども。もっともっとやっていいのかなと。
そういうことで今日もちょっと僕の感想ということで、ぜひ、連携をとってね。今言ったような課題は皆さん課題でもあるんですよ。
だからプロを作るといったらやっぱり小さい時からやっていかないと、その専門の子に育っていかないと思うんですよね。
だから中には不登校になったとしても、そういう専門のことをやっている人がいたってそれはそれでいいわけだよね。

学校行くことを強要すること自体が善であるわけではないと思うので、それに合ったような体制をまた皆さんで議論していただいて、前に進めていただければな、と思います。
ということで今日、子ども部の方、子ども部長が来ているし。教育委員会と連携とってね。
それからちょっと今言ったテーマ、私立中学とかね、小学校も、そういうのがあるわけで、そこには市民がたくさん通っているわけです。そこを知らないということ、市長の立場からいくと、そうはいかない。
市民がどこに行こうが、公立であろうが私立であろうが、市長としてはすべて同じなんですよね。
ちゃんとしっかりフォローする必要がある。
それを見てくれている人が誰もいないというのは、前から強く言っていて、県立高校の校長を全員集めて、教育委員会と一回やったことがあるんですけど、なかなか前に進まなかった。
例えば松戸高校だと、いろんな地域の活動をやったりとか、あるいはいろんな部活動であったり、いろんなところで頑張っていて、市はもっと一緒に入っていてやればいいし。地域に出てきてもらえばいいし。そういう思いで、会議をやったことあるんですけどね。

（伊藤委員）
県立高校はほとんどすべてが開かれた学校ということをスローガンに掲げて地域との交流をやっていますよね。
だから市との協力についても関心をも持っているのではないでしょうか。

〇本郷谷市長
もう全然もっともっとやればいいと思うんですよ。
向こうも遠慮しているだけじゃなくて。なかなか市の市松と他の県立高校とは全然違うだなんて全然思ってないし、どっちもちゃんとしっかりして、やって欲しいなと。
そこも含めて、見ていただくといいなと。
そうしないと誰も見ないんだよね。担当じゃありませんって感じでさ。
ということで、今日、1時間ちょっと、いろんなテーマにね、これを踏まえながらまた教育委員会と子ども部の方で進めていただければなと。
今日よろしいでしょうか。

〇渡邉政策推進課長
ありがとうございました。
ただいま次第の2、議事のところですね、皆様にご意見いただきましてありがとうございました。
続きまして次第の3、その他がございます。
多世代まるごとの居場所づくり「まつどDEつながるステーション」について、総合政策部伊東部長より説明をお願いいたします。

〇伊東総合政策部長
皆様こんにちは。総合政策部長の伊東でございます。
本日貴重なお時間をいただきまして、多世代まるごとの居場所づくり「まつどDEつながるステーション」のご紹介をさせていただきたいと思います。

お手元に配付のまつどDEつながるステーションの案内をご覧いただきたいと思います。
こちらの今日の議論の中にも入っておりましたが、外国の市民の方も増えているということで、英語、ベトナム語、中国語版のチラシも作っております。
現在つながるステーションは市内15地区のうち13地区で作り上げておりまして、お配りしたチラシの各地区の二次元コードから開催情報などを見ることができるようになっております。
もう1つの資料カラー版のですね、市内の高校生向けに作成したippo（イッポ）というパンフレットでございますが、現在、市立松戸高校、県立松戸、馬橋、向陽、六実、松戸国際高校など、市内6校の高校生100名以上に、ボランティアとしてこのステーション活動にご協力をいただいております。
今後もボランティア活動に行きたいという高校生もいらっしゃるということで、学校関係者の方からパンフレットを作っていただいた方がいいんではないかというお話もございまして、この2年間連続して作らせていただいているものをお手元に配付させていただきました。
このつながるステーションの活動でございますが、令和3年度から、地域共生社会を構築するために始めた事業でございまして、緩やかな繋がりを持つことで、地域の中での孤立を防止する。多世代が集まれる居場所という活動でございます。
この活動の背景でございますが、一般的に言われていますように日本の中では、ＯＥＣＤの加盟国20カ国の中で、友人同僚その他の人との交流が全くない、あるいはほとんどないという人の割合が最も高い割合となっていて、調査によれば、社会的孤立が健康リスクに繋がったり、高齢者の生きがいをなくしたり、生活に不安を感じる可能性が高まるとされております。
本市では一般市で最大の人口50万に到達した成熟した街でございますけれども、少子高齢化、核家族化、一人暮らしや外国人住民の増加など、地域との繋がりを持つ上で大きな環境変化が生じていることから、こういった多世代ともに生き生きと暮らすことができるという、地域共生社会の構築を目指して様々な施策に取り組む中で、このつながるステーション活動を始めさせていただいております。
例えば、学校でなかなか友達ができない生徒さん、外国から来られたご家族、障害のある方とそのファミリー、望まない孤立状態の高齢者、松戸に転入してきたばかりで地域にお知り合いのいらっしゃらない方など、多様な背景を持つ方々を地域で支え、見守り、誰でもこられる地域の居場所づくりを、市内各地区で実行委員会を立ち上げて開催しているところでございます。
実行委員会は町会長、民生委員、青少年指導員、保護司、社会福祉士、子育て支援団体や企業などで構成されて、さらに地元の高校生、大学生もボランティアとして参加していらっしゃっております。
事業を実施する中で徐々にではありますが受け手として参加した方が担い手側に回るなど、地域の助け合いが徐々に芽生えてきているところでございます。
会場は、市民センター、町会会館や学校の体育館など、各地区がそれぞれ年間6回程度事業を実施しておりまして、特に学校の夏休み、冬休み期間などは、各地区子供向けの遊びやワークショップをメニューにしておりまして、学校では出会えない地域の人といろいろな体験ができる機会となっております。
本日ご説明をさせていただきましたのは、この取り組みをまだまだ広めたいということで、多くの皆様にご承知をいただき、気になるお子様、ご家族がいらっしゃいましたら、この地区ではこんな催しがありますよと、ご案内いただければと思いまして、先日校長会においてもご説明をさせていただきましたが、今後も継続的に状況を共有させていただきご協力をいただきたいと考えております。

なお事業の周知におきましては地区限定でございますので、広報には、全市版なので、掲載できないので、各地区のホームページと町内掲示板、回覧版などを活用しておりますが、10月1日から市の公式ＬＩＮＥも開始いたしましたので、今後それを活用できるか検討していく予定でございます。
私からの説明は以上でございます。今後ともよろしくお願いいたします。
どうもありがとうございます。

○渡邉政策推進課長
はい。ありがとうございました。

○本郷谷市長
今の多世代まるごと居場所づくりについて、先ほどから人の繋がりの問題があって、すべてのいろんな課題の根本にあるのが、人の繋がりがなくなってきているという問題が、例えば高齢者が何かあったときにバックアップできる体制もできていないとか、子供たちが、両親がみんな働きに行っちゃっていて、子供が1人になっちゃったりとか、いろんな意味で、地域でもうちょっとお互いに助け合うような仕組みが要るということで、地域共生社会づくりというのを1つの大きな柱で今やっています。
市内50万人いますけども、15地区に分けて、大体3万人ぐらいの規模と考えていますけども、その地区ごとに自治会町内会が1つの連合町会という形。それから、民生児童委員みたいなところも18ありますが基本的な、それは地区社協も15、その地区ごとに。ということで、その地区ごとにできるだけ中で人の繋がりができるようにということで、居場所づくり、こういう活動を今、一生懸命、広げてやっています。横の繋がりですね。
子供からお年寄りまでみんなで集まってできるようなイベントを活発化してやっています。
あと地域の居場所づくりでは子供たちでは子ども食堂についても、できるだけ箇所を増やしたいということで、増やしてきて、小学校区、45は超えたと思いますけども、各小学校区に1つぐらいの割合で、子ども食堂も作って、毎日できれば本当一番いいんですけども、なかなかそうはいかないので、集まる場所とか人との繋がりができる場所ということで、今やっていますし、こういう繋がりというのも大変重要だということでやっています。
ぜひ子供もたくさん来てお祭りなんかやったりしていますのでね。いろんなことやっています。
たくさん子供が参加していますので、これも機会があればまた見ていただければと思います。

○渡邉政策推進課長
ありがとうございます。
せっかくですので、この場で担当への質問ですとかご意見があれば、よろしくお願いします。

（山形委員）
山形です。
割といろいろ市として行われるものに結構目を通しているんですけど、まつどDEつながるステーション」そんなに知らなくって、おやこDE広場にぜひ、広報していただけたらと思いました。子育てコーディネーターの方にもしっかりと周知をして伝えていくことができたら、もう少し小さいお子さんの参加率というのは高まるかなというところです。あと、1点すごく私の懸念事項というか、いろんな方が出入りする中でやはり防犯的な部分です。やっぱり大きい方と小さい方と混ざる中での防犯規範だ

とか、あとはジェンダーバイアスとかジェネレーションギャップみたいなところも、埋められるような、そういう能力というか、そういうような配慮ができるような市のスタッフだとかっていうのも、置いていただいた方がトラブル回避にはなるかなあというところは感じました。多世代っていうところはすごくすてきなのではあるんですけれども。
意外と心無い、悪いと思ってない感覚の言葉で、子育て世代の方、傷つくことがあったりするんですよね。例えばどんな授乳方法で育てていますかというのは、全然初めて会った人に突然聞かれたりとか、そんなことがたまにあったりして、最近はコロナを経て、大分減ってはきたのかなと思うんですけれども、いろいろ親しくなる中での、少しバイアスのある時の言葉が消えたとかっていうのは結構繊細にはなってきているかなあと思ったりします。そういう部分も何かしらこの、地域の方っていうのが、民生委員さんとかは研修を受けてらっしゃるとは思うのですけれども、ボランティアの方って、何とかよくしてあげたいと思って前のめりにやっていたら、その一言で、もう来なくなっちゃったとか、こういうところで1回行ったけど、嫌な経験したらもう二度と来てくださらなくなったりするので、心理的安全性を高めるような空間づくりだとかきっとご配慮してらっしゃったりはするとは思うんですけれども、広がれば広がるだけ、その子供と大人との関係性の中の防犯規範や、そういうジェネレーションギャップ的な部分の配慮というのも、市として本当にいい場所を作るのであれば、子育てコーディネーターさんはやっぱ評判はすごくよくて、松戸のママたち、子育て広場、すごく常連で来てくださる方たちみんな安心して使っているのも、そういう研修制度がしっかりしてるからだなと思うので、こういうところでも、入る方への研修だとか、こういうところは安全を確保しましょうとか、何かあったときへの対応みたいなところもぜひ、今やってらっしゃるとは思うのですけれども、その部分への配慮もお願いしたいなと思います。
まつどDEつながるステーション、行ったことないので、行ってみたいと思います。
ありがとうございます。

（和座委員）
僕、先ほど言ったように、孤独っていうことと健康がずっと結びついているという話をしていて、まさにこれはそれに類するものだと思います。
ぜひ医師会の方にですね、これ何部か持って行ってください。私の方から話しておきますよ。
それからあと、例えばこういう多世代の人たちが集まっている場所で、心肺蘇生の話とかＡＥＤの話とかそういうことをして、市民の方たちにぜひそういうことについても、研鑽していただければ。このあいだ小学校のお子さんが、交通事故で亡くなられたという話があって、あのときも、すぐ近くの方が、心肺蘇生はなさってなかったようなんですけども、やれば助かったかどうかわかりませんけれども、シアトルなんかではもうそういうふうなことが市民の方たちが全部ある程度わかっていて、突然死は減ったというのが知られています。
ですからそういうことも含めて、もし僕の方に声かけていただければいつでも行きますので、いつでもと言ってもいいかどうかわかりませんが、声をかけてくだされば と思います。よろしくお願いします。

〇渡邉政策推進課長
はい。
ありがとうございます。

最後に事務連絡をさせてください。
次回の会議の開催日程につきましては、市長部局事務局と教育委員会の事務局と協議をさせていただき、決定しましたらご連絡をさせていただきたいと存じますので、よろしくお願いいたします。
それでは会議の閉会を市長お願いいたします。
◎閉　会
〇本郷谷市長
それでは第1回目について、これで終わりたいと思います。
どうもありがとうございました。